

『しまこい。く姉妹で恋するヒミツの時間く』

特典シナリオ台本

【登場人物】

小日向るりこ（15）

花之音女子学園に通う高校一年生。（ラクロス部所属）

あなたの実の妹。元氣いっぱい、快活な性格。

お姉ちゃんのこと大好き。

想いが通じ合い、最近二人は恋人同士になった。

しかしお姉ちゃんとの約束で周りには秘密にしている。

お姉ちゃんへの想いを抑えきれない彼女は、他人の目を盗んで、様々な形でイチヤイチャしようと迫ってくる。

《年齢》15歳 《身長》158センチ

《血液型》B型 《バスト》D（すこし肉付きが良い体系）

【あらすじ】

あなたは、花之音女子学園の高校三年生。

同じ学校に通う実の妹「るりこ」と恋仲になるも、

周囲の人間に二人の関係がバレないか心配する毎日。

そんなあなたをよそに、

所構わずイチヤイチャしてこようとする妹に振り回される
ドキドキシチュエーションが盛り沢山！

積極的に甘えてくる妹と一緒に、

二人だけの秘密の時間を過ごしちゃいましょう！

【EP01：きみのぬくもりで目が覚める】

○お姉ちゃんの部屋・ベッド上（朝）

「すう……すう……。すう……。すう……」

るりこ、お姉ちゃんが起きたことに気付いて目を覚ます。

「……ん？」

……お姉ちゃん……？ 起きたの……？

……えへへ。おはよう。

お姉ちゃんの可愛い妹、るりこだよー」

「どうしたの？ 目、丸くして。

……朝から私が可愛すぎて、胸がいっぱいになっちゃったとか？
……えー、違うの？」

「……えへへ、びっくりしたでしょー。

昨日の夜、ベッドに潜り込ませて貰いました。

『朝起きたら、妹が隣に寝ているドッキリ』大成功！。
なんちゃって」

「だってお姉ちゃん、ぐっすり寝てて全然気づかないんだもん。
あんなに無防備だとすぐ襲われちゃうよ？」

「……時間？ ちょっと待って。

スマホ、スマホ……。あ、あった。

今ねえ……。えーっと……。6時半くらい」

「……朝練？

試合が終わったばかりだから今週は休み。
放課後は部活あるけど」

「……あー、いつもだったら家出てる時間だもんね。
大丈夫。ちゃんと考えて、お姉ちゃんのベッドに潜り込んでますから。
るりちゃんかしこーい」

「だから今週は、お姉ちゃんをいっぱい堪能すると決めたのだ。」
拒否権は……みとめませんっ」

るりこ、お姉ちゃんに近づいていく。

「……ねえねえ。」

まだ、朝ご飯まで時間あるし……すこしイチャイチャしてもいい？
ママが呼びに来たら、すぐやめるから」

「へーきへーき。」

見つかったも仲の良い姉妹にしか見えないって。
一緒に寝ててもおかしくないよお」

「……もう、心配性だなあ。お姉ちゃんは。
わかってる。『私たちの関係は誰にも秘密』でしょ？
だから、秘密なら、何してもいいんだよね？」

「……こっちきて？……いいから、きてっ」

るりこ、お姉ちゃんを自分の胸元に導いて

「……今、お姉ちゃんの耳、私の胸に当たってるでしょ？
……聞こえる？ 心臓の音。
……すぐ、ドキドキしてるでしょ……？」

「こんなに身体が熱いの、イチャイチャしたらダメなの……？」

「……我慢できない。」

……お姉ちゃん、私のこと、ぎゅーってして？」

お姉ちゃん、るりこを抱きしめる。

「……ふわあ……お姉ちゃんにぎゅーってされるの好き……。もっと、ぎゅーってして？」

「あ、ちょっと強めも、好きかも……」

「……ふふふっ。せっかくだから、匂いも嗅いじゃおっかなあ。
(匂いを嗅いで)……くんくん、くんくん……」

「んー、いい匂い……」

ずうっと嗅いでいたくなる……

(匂いを嗅いで)……くんくん、くんくん……」

「はあ……。匂い嗅いでたら、頭ふわふわしてきた……」

今、私の中、お姉ちゃんにいつぱい。

……ふふふっ。ちょー幸せ……」

「今度は、私がお姉ちゃんを抱きしめる番。
私の幸せ、お姉ちゃんに分けてあげる」

るりこ、お姉ちゃんを抱きしめる。

「ぎゅー……。ぎゅー……。ぎゅー……」

ふふふっ。どーお？ 愛しい妹からのハグは？」

「私の胸に、思う存分、顔をうずめていいんだよ？
ほら？……ぎゅー……」

ふふふっ、柔らかくて気持ちいいでしょ？」

「発育はお姉ちゃんよりいいと思うんだよねえ、私。
立派に成長したと思わない？ 出るところ出たし……」

「……だから遠慮しないで」

この成長した身体を自由にできるのは、

世界でただ一人……お姉ちゃんだけなんだから」

「……………ぷっ！ ふふふっ、ちよつとー、突然笑わないでよお。
たしかに、やりすぎちゃったかもしれないけど…………。
あーもう、顔熱くなってきちゃった…………。」

「…………お姉ちゃん。…………お姉ちゃん。ふふふっ」

「…………でも本当に、私を自由にしても、いいんだよ？」

「…………私、ちよつとずつでいいの。
ちよつとずつでいいから、
お姉ちゃんと恋人らしいこと、していきたい」

「…………お姉ちゃん。」

(キスをして)…………んっ…………ちゅっ。
えへへ、キス、しちゃった。
お目覚めのチューってやつ…………。」

「ねえ、お姉ちゃんからもキスして…………？
…………んっ…………ちゅっ。
ふふふっ。唇、柔らかい…………。」

「本当は、いつだってこんな風にイチャイチャしたいし、
カラオケばかりじゃなくて、
もっと色んなところでデートしたいの…………。」

「…………キスだって、もっと…………。
…………んっ…………ちゅっ。えへへ、おねえちゃん…………。」

部屋の外から足音が近づいてくる。
母が部屋のドアをノックする。

「(ドア越しに) あ、は、はい！ マ、ママ！？
…………うん！ お姉ちゃんと一緒に寝てたー！
うん、…………うん！
二人とも起きてる！ 朝ごはんだよね？
いま着替えて下いくねーっ！」

母の足音が遠のいていく。

「はああ。びっくりした。」

「……ちょっとヒートアップし過ぎちゃった。
ごめんごめん」

「……続きはまた今度しようね。……絶対だからね？」

「……うん。約束。……私たちだけの秘密だよ」

「……お姉ちゃん、大好き」

【EP02：学校だって触れていたい】

○学校・廊下（昼休み）

るりこ、遠くからお姉ちゃんを見つけて

「……あれ？ お姉ちゃん？ おねーちゃんっ！」

駆け寄ってくる。

「どうしたの？ こんなところで？」

普段、この辺りの廊下って一年生しかいないから……」

「もしかして、私に会いにきてくれたとか？」

「……たまたま通り掛かっただけ？ ……そっか」

「ねえ、お昼ご飯食べた？」

私、部活のミーティングあってこれからなんだけど、
もしまだだったら……」

「あっ、もう食べちゃったんだ。

……同じクラスの子と？ ああ、よく話に出てくる……。
生徒会で一緒の子だっけ？ ふーん……」

「別にいゝ。不貞腐れてないよ？」

ただ、美人で優しいお姉ちゃんを持つ妹は大変だなあって」

「……はあ、鈍感すぎ。

お姉ちゃん結構モテるんだからね！」

「生徒会に入ってるから目立つし、

私のクラスでもお姉ちゃんに憧れている子たくさんいるし……。
この前だって、知らない子から手紙貰ってたじゃん」

「……そりゃ、シンパイするよう。
学校ではずっと一緒にいられないから。
こうして話すこともあんまりないし……」

「……まあ、そんな人気者のお姉ちゃんの本
当の姿を知っているのは私だけなんだけどね」

るりこ、耳元で囁いて

「……朝、イチヤイチヤしてた時のお姉ちゃん、可愛かったよ」

「ふふふっ。……私、まだ唇に、キスしたときの感触残ってる……。
午前中の授業、全然集中できなくて困っちゃったよ」

「……あれ？ お姉ちゃん、顔、赤くなってるよ？

今朝のこと、思い出しちゃった？

学校の廊下で変なこと考えるなんて、いけないんだ……」

るりことお姉ちゃん、

気持ちが高揚ってきて、言葉が途切れる。

「……そういえば私……次の授業『社会』なんだけど、
先生に社会科準備室から資料運ぶように言われて……。
……悪いけど、付き合ってくれない？」

るりこ、あからさまな嘘でお姉ちゃんを誘う。

○同・社会科準備室（昼休み）

「……お姉ちゃん。二人っきりになっちゃったね。
（キスをして）……んっ……ちゅっ。

ふふふっ、……はじめてだね、学校でチューするの」

「嘘をつくの下手？

だって、直接言うわけにはいかないじゃん。

……今すぐキスがしたいって」

「……大丈夫。」

お姉ちゃんも知ってると思うけど、
この社会科準備室、滅多に人來ないでしょ？
逢引するにはもってこいの場所だなんて思ってたの」

「……お姉ちゃんがいけないんだよ？

秘密だって約束してるのに、

あんなあからさまに意識されたらさ……。

……イチヤイチヤしたくなっちゃう……。」

「……お昼休みの時間が終わるまで。

ちよつとだけでいいから、

お姉ちゃんをチャージさせて。

そしたら教室戻るから」

「私のお昼ご飯なんていーの。

今は、お姉ちゃんが食べたい。

……では遠慮なく、いただきまあーす……。」

るりこ、近づいてお姉ちゃんを抱きしめる。

「ぎゅ~~~~~……。」

……へへっ、こんなにお姉ちゃんと密着しちゃってる。

……あ、私、汗臭くない？ 大丈夫？」

「な、何？ いきなり変なこと言わないでよ。

汗の匂いが好きとか……。ヘンタイ」

「……まあ、たしかに私も、お姉ちゃんの匂い好きだけど。
朝だっていっぱい匂い嗅いだし……。」

「……お姉ちゃんも嗅ぎたい……？」

（匂いを嗅がれて）ち、ちよつとー！ ふふっ、ははっ！
そんな犬みたいにクンクンしないでー！」

「ふふっ、ははっ！ くすぐったいー！
もー！ やめてっばっ！」

「（解放されて）はあ、はあ……。
お姉ちゃんに意地悪された、ぐすん。
せつかくいい感じのムードだったのに。
恥ずかしがり屋なんだから」

「じゃあ今度は、私が意地悪しちゃおっかなあー？」

るりこ、お姉ちゃんの耳に息を吹きかける。

「……ふーっ。

……どう？ ゾクってした？

小さい時から耳、弱かったよね？ お姉ちゃん」

「ダメ。まだ続ける。

ムード壊した罰。

……ふーっ。……ふーっ。……ふーっ」

「……そんなに震えちゃって。可愛いなあ」

るりこ、反対側に回って。

「反対側の耳も、息、吹きかけちゃうね。

……ふーっ。

反対側だとまた違う感覚がするよね。

どっちの方が好き？

……ふーっ。……ふーっ。……ふーっ」

「……あっ、目が潤んできてるよ？
どっちの耳も好きだったんだねえ」

「うるうるしちゃって〜。

そんな表情で見つめられたら、
誰でもすぐ恋に落ちちゃうね」

「え？ 私？

……言わなくてもわかるでしょ？
……私も、落ちてるよ」

「お姉ちゃんは一？ 私のこと好き？
……照れないで。ちゃんと言って。ほら。
ねえ、私のこと好き？」

「……はい。よく言えました。
普段からこれくらい素直だと嬉しいんだけどなあー？」

「……なんか、暑くなってきたね。
ずっとくっ付いてるからかな？」

「……制服、脱いじゃおっか。そしたら涼しくなるかも。
……上だけでいいから、ぬいじゃおうか。
……ね？」

るりことお姉ちゃん、シャツのボタンを上から外していく。

「……キャミソール、汗ばんでる。
これも取っちゃおうかなあ」

るりことお姉ちゃん、キャミソールを脱いで下着姿になる。

「……へへっ、私たち学校でこんなはしたない格好になっちゃってる。
さすがに恥ずかしいかも……」

「……え？ 下着？ 見せる用じゃないって、
そんな気にしなくてもいいよー。
どんなお姉ちゃんでも可愛いよ？」

「ふふっ、落ち込まないの。
はい。……ぎゅー」

「……お姉ちゃんの肌スベスベ。気持ちいい。
……素肌でくっ付くと、もっと、ドキドキするね……」

「いつまでも、こうしていたいなあ……」

教室の外から近づいてくる足音が聞こえる。

「何？　どうかした？」

聞こえたって？　……足音？」

足音がどんどん近づいてくる。

「わあーっ！　うそうそ！　早く服着なきゃ……
って、ああ、もう時間ない！
と、とりあえずあの掃除箱に隠れよっ！」

るりことお姉ちゃん、掃除箱の中に入る。

○同・掃除箱の中

「ちょっと狭いけどしばらく我慢だね……」

教室のドアが開く。資料を取りに来た先生が入ってくる。

「……（小さな声で）きたっ。しーっ」

教掃除箱の中で、二人は息を潜める。

しばらく経つと、先生が教室から出ていく。

「……行ったかな……？
出ても大丈夫そうだね」

るりことお姉ちゃん、掃除箱から出る。

○同・社会科準備室

「はああー、びっくりしたあ。
まさか人が来るなんて……。
見つかったら一巻の終わりだったよ」

「……たしかに、制服脱いだのはやりすぎだったかも。
でもおかげで、掃除箱の中涼しくてよかったね♪」

「……怒らないでよー。お姉ちゃんだってノリノリだったじゃん。
……はい。
今度から学校で甘える時は、もう少し気をつけるね」

チャイムが鳴る。

「あ、もうこんな時間！ 教室戻らなきゃ！
お姉ちゃん、またあとでね！」

【EP03：こんなに嬉しい雨の日】

○学校・下駄箱の前（放課後）

放課後、外には雨が降っている。

「お姉ちゃん、お待たせ！」

メール見てくれてありがとう」

「……そうそう。この雨で部活なくなっちゃってさ。だったら、お姉ちゃんと一緒に帰りたいなーって」

「……傘は？」

え？ ない？

珍しいね。折り畳み傘、いつも鞆に入れてるじゃん」

「……後輩に貸したあ？ もー、お人好しだなあ。それじゃ、自分は濡れて帰るつもりだったわけ？」

「仕方ないなあ。……じゃーん。マイ折り畳み傘。鞆の底に眠ってましたー。すこし小さいけど、これに入って一緒に帰ろっ」

○路上

るりことお姉ちゃん、相合い傘をしながら歩いている。

「大丈夫？ 肩、濡れない？」

もう少し中に寄ってもいいよ？」

「遠慮しないで。風邪ひいたら困るでしょー？ ほら、入って」

るりこ、お姉ちゃんを引き寄せる。

「えへへ……実はこっそり懂れてたんだ。相合い傘」

「こうして二人で帰るの、なんか久しぶり。」

放課後はずっと部活があって、時間合わなかったし……。突然の雨に感謝だね」

「生徒会は、今どんな仕事してるの？」

あー、文化祭の準備があるんだー。

……だよ。今6月だから、そろそろ動かないと間に合わないよね」

「出し物？ 私のクラスはまだ決まってない。」

この前、ホームルームで何をやるか話し合ったところ」

「人気だったのは喫茶店、お化け屋敷、占い、とかかな？」

定番だけど、どれも楽しそうだから悩むよねえ」

「んー、せっかくだから可愛い格好したいし、

私は、喫茶店推しかなあ。

あ、そういえば、お姉ちゃんも一年生の時、文化祭で喫茶店やってたよね？」

「フリフリのメイド服を着たお姉ちゃん、可愛くて最高だったなあ」

「……私のメイド服姿も見たい？」

そっか、そっか。

じゃあ来週のホームルームで喫茶店に一票入れないとね！」

「まあ喫茶店に決まっても、

メイド喫茶になるかどうかはわからないけど、頑張って推してみる」

「にしても、湿気すごいね。」

私、癖っ毛だから、もう髪の毛ボロボロ。

お姉ちゃんはストレートでいいよね。

姉妹なんだから髪質も同じだったらよかったのに」

「高校生になったし、そろそろ縮毛矯正しようかなあ。
お姉ちゃんはどう思う？」

「……ふむふむ。なるほど。」

パーマかけちゃうのもありだね。
お姉ちゃんは、どっちの私がみたい？」

「……えー、どっちもはナシだよー。
今度また聞くから、それまでに考えておいて」

「あ、みてみて！」

あそこ！ 紫陽花咲いてるよっ！
きれいーっ！
ちよっと近くでみてもいい？」

るりこ、紫陽花に近づいていく。

「雨に濡れてる紫陽花は風情があっていいよねえ……。
……写真、撮るところ」

「お姉ちゃん、ちよっと傘、持ってて。
鞆からスマホ出したい」

るりこ、鞆からスマホを取り出す。

「……あった、あった」

るりこ、スマホのカメラで写真を撮る。

「……いい感じに撮れたよ！ ほら！
写真、結構うまいでしょー」

「そうだ！ せっかくだから、
紫陽花バックで一緒に撮ろうよー！
傘？ どうせ一瞬だから、置いちゃおっ！」

「ほら、寄って寄ってー！
近寄らないとカメラに入らないよ？」

「……はい、それじゃ撮るよー。はい、チーズ」

るりこ、写真を撮る。

「もう、ちゃんと笑ってよー。
あと二枚ー。はい、チーズ」

るりこ、写真を撮る。

「最後ー。はい、チーズっ！……ちゅっ」

るりこ、写真を撮る。

そしてお姉ちゃんのほっぺにキスをする。

「ふふふっ、ほっぺにチューした写真、頂いちゃいましたー！
あとでお姉ちゃんにも送ってあげるねっ」

「あとちよつとで家だね。」

お姉ちゃんと一緒だとあつという間」

「ここの通りもだいぶ変わったね。」

昔、本屋さんとか文房具屋さんとかあったよね。
懐かしいなあ」

「あ、あそこの駄菓子屋、来月閉店しちゃうんだ……。
昔よく一緒に買いに行ったよね」

「私、お小遣いの管理が下手で、すぐ全部使っちゃうから、
いつもお姉ちゃんにおねだりしてたなあ。
思い出の場所がなくなるって、なんか寂しい」

「……そうだね。思い出自体がなくなるわけじゃないもんねっ。
閉店する前に、今度遊びにいこっ！」

雨の勢いが強くなってくる。

「きゃーっ！ やばいーっ！ 雨強くなってきた！」

「いきなり強くなりすぎだ〜！
二人ともびしょびしょっ」

「……これじゃ、傘あってもなくても変わらないねえ。
そうだ。ねえ、お姉ちゃん。

家まで後少しだし、走っちゃおうか」

「決まりっ。

じゃあ、どっちが早く家につくか競争しよ！

勝った方は『相手の言うことなんでも一つ聞く』でどう？」

「……よーいつ、スタートっ！」

走り出すお姉ちゃん、雨の中、駆け出していく。

「(楽しそうに) きゃああーっ！ ふふふっ、はははっ！！」

【EP04：夢見心地のお風呂】

○浴室

お姉ちゃんは先に浴室に入っている。

扉越しにるりこの鼻歌が聞こえてくる。

「おっふる、おっふる、ふたりでおっふる♪
おっふる、おっふる、お姉ちゃんとおっふる♪」

浴室の扉が開く。

「ふわああつ、あったかい。
お姉ちゃん、お風呂入れてくれてありがとうっ」

「……洗濯機？ ちゃんと制服入れて回してきたよー。
出たら乾燥機、入れとくね」

「さっきの、雨凄かったねえー。
早く身体洗ってお風呂浸かりたいー」

「……なに？ お姉ちゃん。
ソワソワしちゃって」

「……ああ、一緒にお風呂入るの、小学生以来だもんね。
裸みせるの、そんなに恥ずかしい？」

「……ちよつとー、出ようとしなのっ！
早く家についた方の言うこと聞く約束でしょ？
私が勝ったんだから、一緒にお風呂入ってっー」

「……いいじゃん、別に減るもんじゃないし。
それにさ……どーせこれから、お互いの裸見る機会増えるんだよ？」

「……スケベなこと？ 考えてるよ、もちろん。
だって恋人同士だし」

「今日は変なことしないからー、お風呂入るだけだからー、
ねえー、お願いっ！」

「やったー！ お姉ちゃんだいすきーっ！」

「……じゃあ、せっかくだから、私がお姉ちゃんを洗ってあげるね！」

「だから、スケベじゃないって。」

これは……そう、サービスだよ、サービス！」

「細かいことはいいから！ いいから！
お姉ちゃん、後ろ向いてー」

るりこ、シャワーの温度を確かめる。

「うんうん。温度はこれくらいかなあ。……よし。
じゃあ髪の毛濡らしていくね」

るりこ、シャワーでお姉ちゃんの髪を流していく。

「どう？ 熱くない？」

「……丁度いい？ よかったあっ」

「それじゃあ、シャンプーしていくね」

るりこ、シャンプーを手で泡だてていく。

「手にとってー、軽く泡だてて……。
よしよし。じゃあ頭いきまーすっ」

るりこ、お姉ちゃんの頭を洗っていく。

「どうですかー？ 痒いところないですかー？
……えへへ、美容院みたいでしょ？」

「美容院でやってもらうシャンプーって、
どうしてあんなに気持ちいいんだろう。
手の力加減が絶妙なんだよねえ」

「……試しにあの感じを思い出しながら、やってみるね」

「マッサージする感じで……手を動かして……。
ゆっくり、ゆっくり、揉み解す感じで……」

「……どうかな？ 気持ちいい？」

「ほんとに！？ よかったあ。
じゃあ、もうちょっと続けるねえ」

「……うん。こんなところかな。
それじゃ、流すよー」

「あ、シャンプー目に入っちゃうといけないから、
軽く下向いててね」

るりこ、お姉ちゃんの髪を流していく。

「はーい、流し終わりましたっ。
そしたら次は背中を洗うね。
お姉ちゃん、その石鹸取ってー。
(受け取って) ありがとうっ」

るりこ、石鹸で手を泡だてていく。

「……石鹸を、こうして手で泡だててー……」

「そういえば、私たち石鹸派になったのいつからだっけ？
……ああ、最初お姉ちゃんが買ってきたんだ。
雑誌に載ってたやつ」

「それからずっとリピしちやってるよね。」
見た目も宝石みたいで可愛いし、肌にも優しいし、
なにより匂いがいいんだよねえ」

「今使ってるこのレモンの石鹸も好きだなあ。
……あ、泡立ってきた。ほら、ふわふわ！
……うんうん、爽やかでいい匂い」

「では、お背中失礼しまーす♪
お姉ちゃんの肌を傷つけないように、優しく洗っていくね」

るりこ、背中を洗っていく。

「泡を満遍なく、すみずみまで……洗い残がないように……」

「……え？ 手つきがやらしい？
そんなことないより、洗ってるだけだよ？
お姉ちゃんが意識しすぎなんじゃない？」

「ただ、これだけお姉ちゃんの肌がスベスベだと、
つい手が滑っちゃうかもしれないねえ……。
……このまま、前も洗っちゃおうかなあ？」

「……ねえ、急に黙らないでよ。
本気でそういう雰囲気になっちゃうじゃん……。
……仕掛けたのは、私だけだよ」

「……そんな目で見ないでよお。
ごめんごめん。
お姉ちゃんに触ってたら、つい高まってきちゃって」

「……だつてー！
たしかにスケベなことはしないって約束したけど、
好きな人が裸で目の前にいるんだよ？
これで興奮しなかったら嘘だよ」

「……はーい。私が悪かったですよお。
それじゃ、前は自分で洗ってくださいーい」

「……その間に私も洗っちゃおーっと」

お姉ちゃんは石鹸で体を洗い、
るりこは自分の髪の毛を洗っている。

「（鼻歌を歌っている）髪の毛あらうぞ、あらうぞ♪
シヤカシヤカ、シユワシユワ、あらうぞ♪
……あらうぞ♪」

お姉ちゃん、体をシャワーで洗い流す。

「お姉ちゃん、洗い終わったー？
そしたらシャワー貸してー？」

「……え？ 髪の毛流してくれるの？ やったー！
お願いしまーすっ」

お姉ちゃん、るりこの髪の毛をシャワーで洗い流す。

「ふうっ、さっぱりしたーっ。

お姉ちゃん、ありがとう。

あ、洗い終わったんだったら、先お風呂入っててもいいよ？」

「……背中？ ……洗ってくれるの？」

さっきのお返し？ ……なら、お言葉に甘えてちゃおうかな」

お姉ちゃん、石鹸を泡だて、るりこの背中を洗っていく。

「ひゃっ！ びっくりした〜。

……ううん、大丈夫。

いきなり背中触られたから、くすぐったくて……」

「……うん。続けていいよ」

背中を洗うのを続けていく。

「……んっ！こ、これはたしかに……ちょっと……。手の感触が直に伝わって、ドキドキしちゃうね……」

「ああもう、そんなゆっくり動かせないでえ……」

「ううっ……お姉ちゃんが黙っちゃった気持ち……んっ！わかる、かも……」

「……でも！お姉ちゃんだって、私の気持ちわかるでしょ？……ほらあ、触ってたら、もっと欲しくなるっていう……」

「……お姉ちゃん。私は……その、前も洗って貰っても？いいけど？」

お姉ちゃん、お風呂に入っていく。

「ああ、もう！お姉ちゃん！

ここまでやったなら、シャワーで流してからお風呂入ってよー！」

るりこ、お風呂に入っていく。

○同・湯船

「ふうーっ、お風呂気持ちいいーっ！生き返るっ！」

「……えへへ、さすがに高校生にもなると、二人で入るにはちよっと狭いね」

「……うん。昔を思い出して懐かしい気持ちになる。小さい頃は何かをするのも一緒だったもんねえ……」

「あ、覚えてる？ タオル持ってきて、クラゲ作って遊んだの。
……そうそう。お風呂にタオルを浮かせて、その中に空気入れてさ、
ぎゅって絞ると、タオルがクラゲの形になって、
ブクブクって泡がでるやつ」

「……ふふっ。……うんうん。
遊びすぎて、指がふやけるまでお風呂入ってたね」

「お姉ちゃんと遊んだ思い出いっぱい覚えてる。
……楽しかったなあ。」

だから、パパの転勤で離れ離れになってすごく寂しかった」

「高校生になって、また一緒になれて嬉しい……」

「一度離れても、またこうして巡り合えるなんて。
まさにお姉ちゃんは私の運命の人だよ」

「……だって、恋人にまでなっちゃったんだから。
これを運命と言わずしてなんと言うか。ってね、ふふふっ」

「……ねえ、後ろからハグしてもいいー？」

るりこ、お姉ちゃんを後ろから抱く。

「……ふふふっ、こっちのほうが恋人っぽいかなーって」

「お姉ちゃんの背中に、私の胸、当たっちゃってるね」

「どう？ 感触は？」

「……ふっふっふー。柔らかいでしょ。」

どうぞ思う存分、癒されてくださいな」

「……そろそろ上がるっか。のぼせるといけないし」

「……そうだ。たしか冷蔵庫に、アイス入ってたよね？
……あれ、お姉ちゃんが買ったの？ 私と食べる用に？」

「……私の好きなやつ選んでくれたんだ。

もー！ お姉ちゃん、好き好きーっ！

上がって髪乾かしたら、一緒に食べようっ！」

るりことお姉ちゃん、お風呂から出ていく。

【EP05：居間で隠れてキスをしよう】

○居間・ソファー

夕食が終わった後の居間。

台所で母が食器を洗っている音が聞こえる。

「ご馳走さまでした〜っ！

はー、美味しかった〜！ やっぱりママの手料理は世界一だね〜。
そして〜食後の休憩はソファーに限るっ！」

「お姉ちゃんのお隣、失礼しまーすっ。

……今日はあっという間に夜になっちゃったねえ」

台所から母がるりこに向かって話しかけてくる。

「なにー？ ママー？」

……洗い物のお手伝い？

ちよっと休憩したらやるからー！」

「そっか。今日、私の当番だった。

……わかってる。サボるつもりはないよ？

でも、私が動くにはお姉ちゃん成分が必要なのです」

「ほら、お姉ちゃん。スマホばかりいじってないで、
私の相手して？」

「……ふふっ。肩、よっかかってもいいーい？」

るりこ、お姉ちゃんの肩に寄りかかる。

「はああ、落ち着く……。

お姉ちゃんこの肩は、私のものでーす。
誰にも渡しませんーっ」

「そ〜し〜て〜、お姉ちゃんのこの腕もー？ 私のものでーす。
えへへ、腕、絡めとっちゃいました〜」

「か〜ら〜の〜、……さりげない、恋人つなぎ。
……下の方で繋いでいれば、ママからは見えないから。
いいでしょ？」

「……ふふふつ。念のために、繋いだ手はお尻で隠しておくね」

「よいしょつと。これで完全に見えなくなった。
……密着しすぎ？ 別に一緒にスマホ見てるだけだよ？ ね？」

「お姉ちゃん、さっきからずっとスマホで何してるの？
……（画面みながら）メール打ってる。誰？
（嫉妬気味に）……生徒会の人？
あー、一緒にお昼ご飯食べてた人だっ」

「……ふーん、明日生徒会で会議があるんだ。
まあ、そういうことなら、仕方ないけどさ」

「なんか陰しい顔してるね。
……ふむふむ。会議に向けて、アイデア考えないといけないんだ？
そういうの、直前に言われると困るよねえ……」

「何か協力できることある？
……まあ、私が考えても大したアイデア出てこないと思うから、
他のことなら……。
……あっ、そうだ」

「お姉ちゃん。いいアイデアを思いつくには、
リラックスできる環境が必要だよね……？
……じゃあさ、私が膝枕してあげよっか」

「よく私が悩んでる時に、
お姉ちゃん、膝枕してくれたでしょ？
だから今度は私がしてあげるっ」

「普通に横になるよりきつと気持ちいいよ？
さあさあ。私のお膝へいらっしゃーい」

るりこ、お姉ちゃんに膝枕してあげる。

「……身体を横に倒して、頭を私の膝の上にのせて……。
あ……ふふっ、目があつた」

「私の膝枕、どうかな？ 癒される？

……寝ちゃいそう？ それは困ったなあ。

気持ちいい、ってことで良いんだよね？ ふふふっ」

「……膝枕するのって、実は初めてかも、私。

これ……すごくいいね。

お姉ちゃんの顔が、私の膝に乗ってるの、すごく、いい。
ペットを膝に乗せてるような安心感……」

「……その、嫌じゃなかったら、
頭撫でもいいかな？」

るりこ、お姉ちゃんの頭を撫でてあげる。

「……いいアイデアが思いつきますように。

……応援してるよー」

「……頭撫でると、お姉ちゃんへの愛しい気持ちが止まらなるね……」

「……あのさ、私、キスしたくなっちゃったんだけど……。
しても、いい？」

「今ここで。ダメ、我慢できない。

……ママは何してるかって？

（見渡して）えーっと……今はー、食卓で帳簿つけてるみたい」

「全然私たちのこと気にしてないよ。今ならいけるって。だから、ねえ……しよ？」

「こっちみて……。」

（キスをして）んっ……ちゅっ……。
えへへ、しちゃったね」

「お昼に学校でイチャイチャした時もあったけど、隠れてしてる方がドキドキするみたい……。」

「もう一回……。」

んっ……ちゅっ……。んっ……ちゅっ……。」

「こんなことしてたら、考え事できなくなっちゃう？
……それは、たしかにそうかも……。
じゃあ……やめる？」

「（キスをされて）んんっ！んっ……ちゅっ……。」

「……お姉ちゃんからキスしてくるの珍しいから、ちよっと驚いちゃった……。」

「もう……。……ドキッと、しちゃったじゃん……。
あー、そんなことされたら余計好きになっちゃうよ……。」

母が椅子から立つ音が聞こえる。

「……マ、ママ？……え？な、なに？
……ああ、洗い物ね！ごめんごめん！
今からやるから！」

「……ふーっ、一瞬バレたかと思った。
お姉ちゃんが急に攻めるから」

「……なんてね。キス、すごく嬉しかったよ。
……またしてねっ」

【EP06：おやすみ、ずっと一緒だよ】

○妹の部屋・ドアの前

お姉ちゃん、るりこの部屋のドアをノックする。
るりこ、部屋のドアを開けてあげる。

「(ちょっと眠そうに) はあーい。誰ー？
……お姉ちゃん！？」

「どうしたの？ こんな時間に。
……何してた？ って、
ちようど今、寝ようとしてたところだけど……」

「……え、一緒に寝てくれるの？
迷惑じゃないよ！ その反対。……ちょー嬉しいっ。
さあさあ、入って」

るりこ、お姉ちゃんを部屋に招きれてあげる。

「……えへへ、
まさかお姉ちゃんから、私の部屋に来てくれるなんて思わなかったなー」
「今日いっぱいイチャイチャしたのに。
まだ足りなかった？」

「……ふふふっ、私も。ぜんぜん足りてない」
「……ベッドいこ？」

○妹の部屋・ベッド

「(ズリズリと潜って) よいしょ、よいしょ。
……はい、お姉ちゃん。お隣どーぞっ。」

「ようこそ、私のベッドの中へ。
……あ、電気、消すね」

るりこ、部屋の電気を消す。

「……狭くない？ 大丈夫そう？」

「……このベッド、お姉ちゃんの部屋のよりも小さいから、密着度すごいね。」

「……ふふっ、ずっとくっ付いていられるの、幸せだなあ」

「……そうそう。これ、お下がりのベッドだよ。」

お姉ちゃんが、中学まで使ってたやつ。

二代で使ってるのに、結構長持ちしてるよね」

「……新しいのじゃなくて、これがよかったの。」

だって、まだ全然使えたし、

それにお姉ちゃんのベッドだよ？

……欲しいに決まってるっ」

「……愛が重い？」

軽いよりはいいでしょ？ ふふふっ」

「……よかったの？」

朝は、あんなに私と一緒に寝ること気にしてたのに。
バレルんじゃないかって」

「……ふふふっ、ようやく吹っ切れてきた？」

だから言ったでしょ？ 仲の良い姉妹にしか見えないって」

「お姉ちゃんは賢いから、バレたらどうなるか不安だったんだよね」

「周りの目が気になるのもわかるよ。」

でも、自分の気持ちを押さえ込んで生きるなんて私には無理……」

「……今日も一日過ごしてて思った。

やっぱり私、お姉ちゃんが好きって気持ち、抑えらんない」

「……同じ気持ち？ そんなの知ってるよ。

だから、お姉ちゃんは私を恋人にしてくれたんでしょ？」

「……責任とって、いっぱい愛してよね」

「……お姉ちゃん、ぎゅってして？」

「……ふふふっ。

……私、お姉ちゃんと過ごす毎日が本当に楽しい。

……私たちの関係、秘密にするのもドキドキしていいけど、
いつかは……」

「……お姉ちゃんの腕の中にいたら安心して、
眠くなってきちゃった……」

「……お姉ちゃん、好き。

……好き。

……ねえ、お姉ちゃんからも聞きたい。好きって」

「……もっと……。もっとーっ。

ふふふっ。……お姉ちゃん……大好き……」

【BONUS】お姉ちゃんの夢 吸血鬼の妹に可愛がられる件

○ベッドの上

「……お姉ちゃん、おねーちゃん。
ふふっ、やっと起きたあ」

「そろそろ食事の時間なんだから、
ちゃんと起きてくれなきゃ困るよお。
私もうお腹ぺこぺこ」

「……何を食べるのかって？
決まってるでしょ？ お姉ちゃん、だよ？
まだ寝ぼけてるの？
いつもお姉ちゃんは毎朝私に健康的な血液を分けてくれるじゃない？」

「ふざけてないってば。
あなたの妹のるりちゃんは、『吸血鬼』なんですよ？
お姉ちゃんの血を吸わないと生きていけないのです」

「……夢でもみてるんじゃないかって？
何言ってるの？ 前から私は吸血鬼だよ？」

「……別にそんなこと、どうでもいいじゃん。
夢でもなんでも。
私に吸血されると、
とっても気持ちよくなるの、知ってるでしょ？」

「痛くないから。優しく噛むから。
ねえー、早く吸わせて？
ほら、肩出して……」

るりこ、お姉ちゃんの上着を脱がす。

「誰の血でもいいわけじゃないんだよ？

お姉ちゃんだから、いいの。

また明日も吸ってあげるからね、ふふっ」

「……吸血鬼でも、妹でも、

お姉ちゃんは私のことをちゃんとみて、愛してくれるね。

そんな優しいお姉ちゃんだから、きつと私、好きになったの」

「……お姉ちゃん。

……お姉ちゃんのことを好きだって気持ち、
いっぱい伝えさせて」

「すき……すき……すき……すき……すき……

すき……すき……すき……すき……すき……」

「……ふふっ、反対側にも」

「すき……すき……すき……すき……すき……

すき……すき……すき……すき……すき……」

「……大好きだよ。

ずっと、ずっと、一緒にいようね、お姉ちゃん」